

川河口にかけてが最も中心的な産卵場となつています。

卵は直径が〇・二五ミリメートル程度の小さな球型で、淡いブルー色をしています。一匹の雌メスから、およそ千七百〜二千三百粒の卵が、水深二十〜五十メートルの付近にばらばらに産み出されます。一日半ほどでふ化し、浮遊ふゆうしながら変態を重ねて、約一カ月で稚エビに、十〜十二カ月で親エビへと成長していきます。

産卵を終えた親エビは、まもなく寿命が終わり、十一月ごろにはすべてその年に産まれたサクラエビ（新エビ）となります。

## サクラエビ漁

### ●漁業のおこり

庵原郡由比町や蒲原町では、明治時代の

エビ漁の始まりといわれています。

### ●焼津沖での操業

明治時代までは自由操業のため漁獲量もどんどん増えていきましたが、大正時代に入って許可制となり、静岡県から許可を得た漁業者以外は漁に出ることが許されないようになりました。そして、サクラエビ保護のために繁殖期はんしゅうきの六月から九月までが禁漁期間と定められました。また、漁が盛んになるにつれて漁獲量の競争が漁船の間で激しくなり、大正六年から漁船の数も制限されるようになりました。

昭和二年、サクラエビが不漁になった時のことです。由比町の望月伊之助氏らがエンジン付きの船で焼津沖合に出かけて行き、サクラエビの水揚げを確認。このころから地元の焼津周辺の漁民も漁を行うようにな

中ごろまで、キス縄やサメ縄の底釣り※漁を主体に沿岸漁業が営まれてきました。このころ既に、春から夏にかけてサクラエビが取れていたそうです。しかし量が少なく、生で天日干しにするほかは加工方法もわからず、漁業として成り立つまでにはいきませんでした。

明治二十七年、由比町に住んでいた望月平七氏と渡辺忠兵衛氏の共同の漁船が富士川沖で漁をしていた時のこと。網に付いた浮き樽たが外れてしまい、網は海中深く沈んでしまいました。そのため深海魚のサクラエビが偶然にも大量に取れ、これがサクラ

※底釣り漁：一本の縄に6メートル間隔に針とえさを付けて、キス縄は水深五百メートル、サメ縄は水深七百〜八百メートルくらいまで下げて魚を釣る漁法

つてきました。最初は船も漁具きぐも思うようにはそろわず、由比や蒲原に行つて廃業した家の船を買い求めたり、船をたくさん持っている家のものを譲ってもらつたりと、苦勞を重ねたといえます。以後、漁船は発動機が取り付けられて次第に大型化し、漁獲量もかなりの量を上げるようになっていきます。さらに昭和十五年、蒲原の加工業者が大井川町に移り住み、工場を建設。蒲原や由比で行われてきた加工技術が伝わつて、現在の大井川町の加工業の基礎が築かれました。

### ●現在のサクラエビ漁

サクラエビ漁では二隻が一組となつて漁を行い、この一組の漁船を一統いつしゆといえます。駿河湾でサクラエビ漁に携わっている漁船の数は、現在六十統（百二十隻）。漁船は由